

---

**原著**

# 1960年代の体操における動きのゲシュタルトウング (Bewegungsgestaltung) の意味と方法について

— J. ホラー = フォン・デア・トレックの著作を手掛かりにして —

菅井 京子

## Über den Sinn und die Methode von der Bewegungsgestaltung in der Gymnastik der 60er Jahre

Anhand von J.Holler-von der Trencks "Sinn, Bedeutung und Entwicklung des  
Gestaltens in der Modernen Gymnastik" und "Moderne Gymnastik—Lehrweise Medau"

SUGAI Kyoko

Zusammenfassung

Die neuen Gymnastikschulen, deren Tätigkeiten über die Gymnastikbewegung in den 20er Jahren, "Deutsche Gymnastik" 1935 und "Moderne Gymnastik—Lehrweise Medau" 1967 weiterentwickeln, hatten sich von der Körperbildung auf die rhythmische Bewegungsschulung und Bewegungsbildung verlegt. Mit dem Wort "Bewegungsschulung" oder "Bewegungsbildung" ist das Wort "Bewegungsgestaltung" immer verwendet worden. Aber das wurde nicht genug erklärt. Die Bewegungsgestaltung wurde in den 60er Jahren wieder beachtet und als das Thema vom IV. Kongress für Leibeserziehung 1967 gewählt. Im Bericht dieses Kongresses wurden die Aufsätze von O.F.Bollnow, O.Grupe und A.Seybold veröffentlicht. O.F.Bollnow hielt die Gestaltung für das führende Mittel zur höheren Freiheit und zur Erfüllung des Lebens über die Alltäglichkeit, die von der Notwendigkeit und dem Zweck des Lebens eingeschränkt wurde. Die Bewegungsgestaltung hielt er für eine bewusste Bewegungsformung, die eine gewesene Bewegung vervollkommenet. O.Grupe schrieb, daß die Bewegungsgestaltung zur holistischen Erziehung beitrug, sie trotzdem keinen Zweck außer sich selbst hat und sie deshalb eine vernünftige Überprüfung brauchte. A.Seybold schrieb, daß die Bewegungsgestaltung eine bewusste Bewegungsformung nach dem Gesetz, das der Bewegung innewohnt, zur Vollkommenheit führte. Sie beruhte auf dem Gesetz und betrachtete die Bewegungsgestaltungsmöglichkeit nach den Eigenschaften der Lehrstoffe in der Leibeserziehung. Sie ordnete die Gymnastik und den Tanz den hohen gestaltungsmöglichen Lehrstoffen zu. Und sie hielt das Gesetz in der Gymnastik für das Herausformen von Auftakt, Akzent und Ausklang für wichtig. Die Bewegungsgestaltung in der Gymnastik im Aufsatz von J.Holler-von der Trenck bewertete sie sehr hoch und zitierte ihn.

Ziel der vorliegenden Arbeit ist es, den Sinn und die Methode der Bewegungsgestaltung in der Gymnastik der 60er zu klären. Dabei soll J.Holler-von der Trencks 'Sinn, Bedeutung und Entwicklung des Gestaltens in der Modernen Gymnastik' 1967 und H.Medaus "Moderne Gymnastik—Lehrweise Medau" 1967 berücksichtigt werden. Nebenbei bemerkt ist J.Holler-von der Trenck eine Mitverfasserin der "Moderne Gymnastik—Lehrweise Medau".

J.Holler-von der Trenck wies darauf hin, daß die Bewegungsgestaltung in der Gymnastik der 60er das

Herausformen d.h. Formen und Schaffen von organischer und rhythmischer Bewegung (Auftakt, Akzent und Ausklang) bedeutete und zur reichen Bewegungserziehung, die die Bewegungsschulung und die Bewegungsbildung seit der Gymnastikbewegung übernahm, beitrug. Außerdem wies sie konkret auf die Methode der Bewegungsgestaltung hin. Das waren die rhythmischen Glieder der Bewegung zu charakterisieren durch die Dynamik und die Agogik, die sie als die Elemente des Rhythmus für am wichtigsten hielt. Und sie fügte hinzu, daß zusätzliche Elemente auch der Raum, die Handgeräte, der Partner, die Gruppe etc. waren. Auch betonte sie, daß die rhythmische Bewegungsformung und die Bewegungsgestaltung in der Gymnastik immer zeitgleich verliefen.

## はじめに

20世紀の初め頃から始まった体操改革運動は、F. ヒルカーを中心として1922年に「芸術的な身体修練のための会議」を開催して、1925年には「ドイツ体操同盟 (Deutsche Gymnastikbund)」を設立し、1960年代まで続く大きな流れを形成していった。そこでの新しい体操諸派の活動は、シュピース＝マウル方式の体操や形骸化したスウェーデン体操の部分運動の組み合わせによる「からだづくり」の体操から、リズムカルな「動きの修練、動きづくり」へと、その重点を大きく移していった<sup>1)</sup>。この体操諸派の活動のなかで、「動きのゲシュタルトウング」という言葉は、常にこの「動きの修練、動きづくり」とともに用いられ、体操の研究領域のなかで重要な一領域を形成するものとされたが、十分な説明はされてこなかった。この「動きのゲシュタルトウング」は、60年代になって再び注目されるようになり、第4回体育専門家会議 (IV. Kongress für Leibeserziehung 4.-7. Oktober 1967 in Stuttgart) のテーマに取り上げられた。

これまでの研究<sup>2),3),4)</sup>では、この会議の報告書に掲載されたO.F. ボルノー (Otto Friedrich Bollnow, 1903-1991)、O. グルーベ (Ommo Grupe, 1930-2015)、そしてA. ゼイボルト (Annemarie Seybold, 1920-2010) の論文を手掛かりに、動きのゲシュタルトウングの意味を明らかにしようとするものであった。O.F. ボルノーは、ゲシュタルトウングを、必要や目的に関連して合理的に形成された生活世界の制約を越えて、より高い自由へ、生の充実へと人々を導くようなものとし、動きのゲシュタルトウングを、すでにある動きを変化さ

せ、人間の動きの完璧な形態へと、つまり全体としてまとまった有機的な動きの流れが豊かな形態をもつように意識的に形成することであると述べた<sup>5)</sup>。O. グルーベは、動きのゲシュタルトウングを、それ自体の他に目的をもたないとしながらも、教育的視点から全人的教育に資するものとし、それゆえその際に合理的な点検も必要だとした<sup>6)</sup>。A. ゼイボルトは、動きのゲシュタルトウングを、動きに内在する原則に従って、すでにある動きを完全なものへと意識的に形成することとし、それに立脚して体育における動きのゲシュタルトウングの可能性を種目特性によって考察し、ダンスや体操ではその可能性が非常に高いとした<sup>7)</sup>。そして、彼女は、体操に内在する原則を「アウフタクト (上拍)<sup>8)</sup>、アクツェント (強調)<sup>9)</sup>、アウスクラング (終わり) (Auftakt, Akzent und Ausklang)<sup>10)</sup>をつくり出すこと」と捉え、体操において、動きのゲシュタルトウングは、リズムカルな動きのなかで行われ、その動きの形態的、時間的、力動的、空間的な変化・発展のなかで、そのゲシュタルトが現れるとした。また、彼女は体操における動きのゲシュタルトウングの方法について、次のように述べている。「ダンス的運動遊戯、体操的動きのゲシュタルトウングといわれるものは、神秘的な秘技ではなく、ひとつのまとまった全体へと簡単な運動形態を空間的、リズム的に結びつけることで、手順に従って行う職人仕事のようなもので、音楽におけるコンポジション練習のように明確な形式上の規則をもった簡単なコンポジション運動である。」<sup>11)</sup>そして、その萌芽が見られるとして、J. ホラー＝フォン・デア・トレック (Jutta Holler-von der Trenck, 1923?-1974)<sup>12)</sup>の論文を高く評価

し引用している。J. ホラー = フォン・デア・トレルクは、H. メダウ (Hinrich Medau, 1890-1974)<sup>13)</sup>の体操学校で教師を務めており、メダウの協力者として活動している。そのH. メダウは、体操改革運動の初期の頃から1960年代に至るまでの長い期間その運動を推進してきた人物であり、その間に7年ほどボーデの体操学校でR. ボーデ(Rudolf Bode, 1881-1970)の体操理論の普及にも努めてきている。それゆえ、メダウの体操に関する理論と実践は、体操改革運動の推進のなかで形づくられた主要な考え方を受け継いでいるものと考えられる。

そこで、本研究では、H. メダウの体操理論を受け継いだJ. ホラー = フォン・デア・トレルクの論に基づいて、1960年代の体操における「動きのゲシュタルトウング」の意味と方法を明らかにすることを目的とする。その方法としては、J. ホラーの論文「体操におけるゲシュタルトすることの意味、意義、そしてその展開について」<sup>14)</sup>とH. メダウがその妻S. メダウとJ. ホラーとの共著で1967年に出版した『新しい体操—メダウの教授法』<sup>15)</sup>の2つを主な資料として、そこで記述されている「動きのゲシュタルトウング」の内容を読み解いていく。その際に、まずJ. ホラーがその論文において「動きのゲシュタルトウング」をどのように捉えているのかを検討し、次にそうした理解がメダウの体操との関わりのなかでどのように形づくられているのかをみていく。

## I. J. ホラー = フォン・デア・トレルクの論文にみる動きのゲシュタルトウングの意味・意義・方法

### 1. 体操における「動きのゲシュタルトウング」の意味について

J. ホラー = フォン・デア・トレルクは、その論文「体操におけるゲシュタルトすることの意味、意義、そしてその展開について」のなかで、まずリズムとゲシュタルトウングの関係について説明し、動きのゲシュタルトウングの意味を次のように明らかにしている。「人間は、生きているもの

のなかにひとつの秩序と形成を感じ取るものである。もしその人間が健康で、生命力に溢れ、そして有機的・全体的に周りに反応するならば、その動きの秩序はリズムカルでダイナミックである。このような秩序とその形成は、本源的な生の感覚から起こり、やはり本源的な生き生きと生きていることを表す。そうするうちに、流れるような動きのなかに緊張、弛緩、休止の交替が展開される。私たちは、この経過をリズムカルであるといい、これをつくり出すこと (Herausformen) をゲシュタルトするという。」<sup>16)</sup>

ここで問題になっているリズムを、彼女は「2つの対立するもの、すなわち緊張と弛緩が一方から他方へ移行するのをうまく切り替わるように結びつけ、形づくることである。また、相対するものの一方から他方への移行が生じる際にはちょっとした休止が混じらなければならない」<sup>17)</sup>ものとして捉え、さらにR. ボーデのリズム論<sup>18)</sup>を引いて次のように説明を加えている。「ボーデ以来、次のことがよく知られるようになった。あらゆるリズムカルな動きは、準備して構えることから、力の投入へ至り、そしてそれから再び消えていくという流れをもつ、つまりリズムカルな分節は本来3つの部分から成り立っているということである。」<sup>19)</sup>また、この3分節の捉え方をより正確にするために、次のように説明が続けられている。「アクセントをつけることで敏速で活発になることから、しばしば間違った考えが生じる。リズムカルな動きは、時計の振り子のように、あっちとこっちへ揺れ動くというような、間に移行もない、ただ緊張と弛緩を交替する2分節であるというのである。しかし、まさに、この点に、機械の動きと有機的な動きとの違いがある。体操においては、有機的な動きにこそ関心があるのであるから、あらゆる動きのゲシュタルトウングの基本形は、3分節である。」<sup>20)</sup>ここでJ. ホラーがいう3分節とは「アフタクト、アクツェント、アウス克蘭グ」のことであり、ボーデの主張するリズムカルな動きの理論と同様の、体操におけるリズムカルな動きの基本とされるものである。

その体操について、彼女は芸術と対比させて次のように述べている。「体操は、多くの近代芸術の表現のように人間性拒否の状況の模写やそれへの警告として行われるのではなく、身体から出発し物心両面の人間の統一を得ようと努力するような、有機的に調和の取れた発達のための助けとして行われる。その手段となるものは、リズムカルで有機的な（生き生きとした）動きで、そのような動きはゲシュタルトウングに調和と洗練をもたらす。ここで、体操の動きの形成やゲシュタルトウングの領域は、芸術とは明らかに一線を画することになる。私たちは私たちの目標のために、人間の多様な動きの形態とその可能性から、目的に適したものを選び出す。すなわち、有機的な動きとそのリズムカルなゲシュタルトウングである。」<sup>21)</sup> また、彼女はゲシュタルトウングを含む体操の全体像を次のように示している。「私たちの身体やその機能もつ生命のリズムに耳を傾けること、そのリズムを妨げたり、抑制したりすることなく活発にし、高めることは、有機的な動きの教育の基礎になる。…（中略）…それは、動きのリズムカルな形成の練習から、生き生きとして表出豊かな、力強い、そして多才な創出をもたらすようなゲシュタルトウングにまで通じる。」<sup>22)</sup>

そして、J. ホラーは、これまでみてきたリズムとゲシュタルトウングの関係、体操の内容、その全体像を踏まえて、体操における動きのゲシュタルトウングの意味を次のようにまとめている。「体操におけるゲシュタルトウングの意味は、あらゆる動き、そして動きのモチーフからモチーフへの移行の際に、アウフタクト、アクツェント、アウスタラングをつくり出すことであり、他の何ものでもない。」<sup>23)</sup> 彼女は、ゲシュタルトウングについて、常に「つくり出す (herausformen)」と述べている。これは、形成し、創出することを一語で表している。つまり、J. ホラーは、生き生きと生きている人間がリズムカルな動きを形成すると同時に創出することを動きのゲシュタルトウングと呼んでいる。

## 2. 体操における「動きのゲシュタルトウング」の意義について

J. ホラーは、この論文で、ゲシュタルトウングについて、「人間の根源的欲求のひとつである」<sup>24)</sup> としているのであるが、動きのゲシュタルトウングについては、「あらゆる種類のゲシュタルトウングの前提条件となることから、動きの教育 (Bewegungserziehung) において、重要な位置を占める」<sup>25)</sup> と述べている。

そして、そのような動きの教育の道筋について、まず、「自身の身体を知ること」と「感じ取ること」を通して、個々の生が展開し、すべての生のゲシュタルトウングが展開するような「リズムの法則」を知るに至り、そうすることによって創造的な成果すなわちゲシュタルトへ導くことができる」と主張している<sup>26)</sup>。具体的には、まずリズムの本質をよく感じ取ることのできるものとして呼吸を挙げ、次のように述べている。「絶え間のない呼吸の生命力に溢れた力と繊細な力動性は、生き生きとしたゲシュタルトウングの能力を助けるものであり、その力の前提でもある。ゲシュタルトウングは、動きの喜びや衝動としての自分自身の内的な活力に耳を澄ませることから出発する。」<sup>27)</sup> そうした呼吸の律動性を前提にして、生き生きとしたリズムカルな動きを形成すると同時に創出する、すなわち動きのゲシュタルトウングがなされる。さらに、「ゲシュタルトすることにおける自身の活動や自身の経験は、ゲシュタルトウングのあらゆる形成のための理解を促進し、価値や質を捉える感覚を鋭敏にし、この理解や感覚が私たちに豊かなそして深められた生を可能にする。」<sup>28)</sup> そして、「もし、そこからさらに音楽的活動や文化的活動への参加が活発に展開されるならば、この動きのゲシュタルトウングの仕事の目標は達せられたといえるであろう」<sup>29)</sup> とも述べている。

また、彼女は、動きのゲシュタルトウングがもつ今日的な重要性を次のように強調している。「今日の物質主義の世の中では、人間にとって自身の創造的ゲシュタルトウングのための能力や可能性

を保つことが何より重要になる。こうした自身の根本的なゲシュタルトウングが、子どもであれ大人であれ、性格的、精神的、倫理的、そして身体的な発達にどれほど重大な影響を及ぼすことか、そして、この意義を無視することがどれほど壊滅的に作用するかを、現代の心理学は証明している。<sup>30)</sup>

以上みてきたように、J. ホラーは、ゲシュタルトウングを人間の根源的欲求のひとつであり、従って、動きのゲシュタルトウングも同様であるとしている。そして、動きのゲシュタルトウングがあらゆる種類のゲシュタルトウングの前提条件となることから、動きの教育にとって大変重要なものであり、ここに、動きのゲシュタルトウングの意義を認めている。

### 3. 体操における「動きのゲシュタルトウング」の方法について

これまで「動きのゲシュタルトウング」のもつ意味と意義についてみてきたが、J. ホラーは、体操における動きのゲシュタルトウングの具体的な方法についても、この論文で詳しく述べている。彼女が提示している方法は、大きく3つに分けられた段階を順に行っていきながら動きを洗練させていくというものである。以下で、それぞれの段階についてみていく。

まず最初は、動きの経過に速さと強弱の規定のある基本運動から始められる。ここでは、個人個人で基本運動をゲシュタルトし洗練させるのであるが、それを他の人と共同で行うこともできている。その共同で行うということについて、J. ホラーは次のように述べている。「多くの場合、ゲシュタルトすることの練習は、最初から共同で行われる。個々人のゲシュタルトウングとグループダイナミクスへの同調が互いに入れ替わる。真似て動きを形成することや真似てゲシュタルトすることは、独自の形成やゲシュタルトウングと同様に意味のあることである。」<sup>31)</sup>

次に、2番目の段階においては基本運動の組み合わせによって一連の動きのモチーフを展開す

ることになるが、その際には、動きのモチーフを空間的・リズム的に変化させ、また緊張の質や程度を変化させることがねらいとされている<sup>32)</sup>。そこでは、強弱と緩急に重点をおいたリズムの変化が動きのゲシュタルトウングにとっていかに重要であるかを以下のように説明している。「リズムの基本としての強弱法 (Dynamik)<sup>33)</sup> と緩急法 (Agogik)<sup>34)</sup> は、自然な動きの衝動がどのように根源的な感覚から生じるかを描く写し絵である。拍や拍節 (Takt und Metrum)<sup>35)</sup> が正確に見分けられて描写されていたとしても、強弱法と緩急法が欠けているところでは、有機的・リズム的な動きのゲシュタルトウングは全く生じない。まず、強弱法と緩急法によって、拍節がリズムになり、型にはまった秩序が生き生きとした生の実際の姿になる。とりわけ、私たちには、生きているという現実的な、つまり感覚の生き生きとした動きを展開させることが重要なのであるから、ゲシュタルトすることの練習は、すでに最も簡単な体操の練習の際に、それに適した強弱法と緩急法の創出とともに始まる。」<sup>36)</sup>

こうした2段階の練習を経て、次の3番目の段階では独自の動きのゲシュタルトウングを目指すとしている。ここでは、ゲシュタルトウングの課題と前もって定められた動きの練習の課題を交互に繰り返すのであるが、その際に生徒たちの想像力と意欲には過大な要求をせずに十分な励ましを与えることが重要とされている。その理由について、J. ホラーは次のように述べている。「生徒たちが自身のゲシュタルトウングに向かっていこうとする勇氣は、体験を通して、手本と模倣を通して、ゆっくりと育つものである。その勇氣は、とても華奢な小さな植物のようなものであり、もし私たちが多くの要求をし過ぎなければ、細心の配慮をすることによってのみ発達する。生き生きとした動きを捉える感覚は、真似て追体験することやそれに同調することから生まれる。その際に手本とされるものは非常に重要なものとなる。」

<sup>37)</sup> ここで彼女が手本として挙げているのは、古くからあるフォークダンスや集団でのダンス、あ

るいは新しくできたそれらのダンス等であり、これらの様々なダンスは体操の教材に含まれるという。なぜなら、それによって簡単に誰にでもできる動きのモチーフを展開させる方法を知ることができるからだという。それについて、彼女は次のように述べている。様々なダンスを手本にすることにより「例えば、8から16小節で繰り返すとか、ABA形式<sup>38)</sup>でとか、または、その拡張として5部あるいは7部形式で展開させることを知るようになる。さらに、色々な質の異なるモチーフをつなぐこと、そのヴァリエーション、緊張を高めること、移行のゲシュタルトウング、リズムと空間の関係等の最も簡単な可能性を知ることになる。このような実際の練習から、徐々に自身のモチーフ選択とそのゲシュタルトウングへの能力が生まれてくる。基本的には、初めは1部形式、あるいはせいぜい3部形式に限定し、そして動きの空間的拡大はできるだけ控えるべきである。」<sup>39)</sup>

さらに、動きのモチーフの選択については、次のように述べられている。「全く、音楽におけるのと同様に、私たちはまず最初に、そこから第一主題が展開するような動きのモチーフを選ぶ。それには、やはり音楽におけるのと同様に、単純なモチーフが最もよい。というのも、すべての基礎的なものや単純なものは、ひとりでに展開し、強まり、変化し、分化していくからである。」<sup>40)</sup>そして、彼女が動きのモチーフの例として挙げているのは次のものである。一步、あるいはちょっとした一連のステップ。跳ぶ、あるいは走って跳ぶ、はずんで跳ぶ等の動きの組み合わせ。はずみのある腕の動き、あるいは静かに導かれるようにゆっくりと動かされる腕の動き。体の中心から大きくなったり、小さくなったりする動き。立ち上がる、あるいは座る、また、曲線、対角線等を描くもの。こうした具体的な例のなかから選択して動く際に、彼女は次のことに注意を求めている。「選択された動きのモチーフの特徴は、リズムカルな動きの形成の際にも残しておかなければならない。例えば、静かな、丸い、はず

みのある、リラックスした、あるいは、はっきりとした、直線的な、突くような、また、活気のある、わくわくするような、そして、軽い、重い等々である。」<sup>41)</sup>

このようにモチーフの選択について述べた後、J. ホラーは基本運動や一連のモチーフのリズミック、力動的な変化・発展やその展開について、メダウの教授法の一例であるゴシック様式とロマネスク様式の曲線の活用を挙げている。それは、強く上昇し、そして次に再び下降する緊張を表しているゴシック様式の曲線あるいは尖塔曲線と、揺れ動き、そして流れるような移行で強まったり弱まったりする緊張を表しているロマネスク様式の曲線あるいは半円曲線という、特徴の異なる2つの基本形を組み合わせるといえるものである。その組み合わせ方について、彼女は次のように述べている。「このそれぞれの曲線は、1部形式であり、それを連ねて3部形式を展開することができるし、さらに5部、そして7部形式も可能である。その際、私たちはリズムの法則に従う。すなわち、対立するものをよい移行によって結びつけるのである。例えば、3つのゴシック様式、あるいは3つのロマネスク様式の曲線を連ねるのではなく、入れ替える。ゴシック様式-ロマネスク様式-ゴシック様式、あるいはその反対に。その結果、中間部分は、静まった移行あるいは緊張した移行になる。」<sup>42)</sup>彼女はまた、このことを音楽の形式に例えて次のようにも説明している。「私たちは、ABA形式をその原型のひとつと見なすような音楽の形式に従う。主題-対立主題-最初の主題の確認と強化、である。それから、5部形式も展開される。ABABAか、ABCBAか、またABACAか、そして、7部形式も同じように展開することができる。」<sup>43)</sup>このように、J. ホラーは、動きのモチーフを見つけ出し、これをリズム的・力動的に、そして空間的に変化・発展させ、新たなゲシュタルトをつくり出す練習をすすめている<sup>44)</sup>。さらに、「パートナーとの動き、手具を伴う動き、空間や音楽、そしてつましく地味な方法での光、色、衣装との関係で動くこと」<sup>45)</sup>へと展開していくのだ

という。

そして、彼女は、体操においては、常に、リズムミカルな動きの形成とゲシュタルトウングは同時進行すると、次のように述べている。「ゲシュタルトウングの能力は、ひとりでは生じない。ゲシュタルトすることの恒常的な練習からそれは伸びる。これは体操の練習の初日にすでに始まりうる、いや始まらねばならない。すべての練習は、リズムミカルに秩序づけられ、形成され、ゲシュタルトされるのがよいのである。」<sup>46)</sup> このようにして、ゲシュタルトすることを練習し、ゲシュタルトウング能力を発達させて、自身の動きをより確実なものにし、洗練させ、有機的にするというのである<sup>47)</sup>。

以上みてきたように、J. ホラー＝フォン・デア・トレンクは動きのゲシュタルトウングの方法として、まず速さと強弱の規定のある基本運動の練習から始め、次に基本運動の組み合わせによって一連の動きのモチーフの展開へとつなげている。その際には、リズムの基本となる動きの強弱や緩急を重視して展開していく。さらに、前もって規定された動きの課題と新たに創り出す動きの課題を交互に繰り返すことで、それぞれの想像力と意欲に基づいた自身の動きのゲシュタルトウングを目指すのである。これが、J. ホラーの考える動きのゲシュタルトウングの方法といえる。

## Ⅱ. メダウの体操における「動きのゲシュタルトウング」

### 1. メダウの体操について

1967年に、H. メダウは、S. メダウ (Senta Medau, 1908-1971) および J. ホラー＝フォン・デア・トレンクとともに『新しい体操 --- メダウの教授法』を出版し、その体操の理論と指導法を明らかにした。そのなかで、彼は体操の目的を次の3つの柱で説明している。それは、健康、よい形態と姿勢、目的に適した洗練された動きである<sup>48)</sup>。そして、彼は、体操の研究領域として、次の7つを挙げている<sup>49)</sup>。

- ・姿勢教育 (Haltungserziehung)
- ・動きの発展 (Bewegungsentwicklung)
- ・空間における動き (Bewegung im Raum)
- ・動きのゲシュタルトウングとダンス (Bewegungsgestaltung und Tanz)
- ・器官体操 (Organgymnastik)
- ・動きの発展の学際的研究 (Grundformen der Bewegungsentwicklung)<sup>50)</sup>

この7つの研究領域のひとつとして、「動きのゲシュタルトウング」が取り上げられている。

H. メダウは、体操改革運動が実質的に始動した<sup>51)</sup>「芸術的な身体修練のための会議 (1922年)」にも若い体育教師として参加し<sup>52)</sup>、その後もその運動を推進してきた中心的な人物のひとつで、息の長い体操家である。それゆえ、この『新しい体操 --- メダウの教授法』の記述においても、体操改革運動のキーワードとされるものが多く用いられている。しかも、同じ頁<sup>53)</sup>に、1935年の『ドイツ体操』<sup>54)</sup>でも用いられている「動きの修練 (Bewegungsschulung)」と「動きづくり (Bewegungsbildung)」という用語が、そして、1940年代に F. ヒルカーによって導入されたといわれる<sup>55)</sup>「動きの教育 (Bewegungserziehung)」という用語も見受けられる。一方 J. ホラーの執筆部分<sup>56)</sup>では、一貫して「動きの形成 (Bewegungsformung)」と「動きの教育 (Bewegungserziehung)」が用いられており、用語の使い方に若干の違いがみられるが、H. メダウも J. ホラーも「動きのゲシュタルトウング (Bewegungsgestaltung)」については、F. ヒルカーが1935年の著書『ドイツ体操』で用いた用語を基本的に受け継いでいる。それだけでなく、彼らの1967年の著書『新しい体操 --- メダウの教授法』のなかでは「動きのゲシュタルトウングとダンス」<sup>57)</sup>という領域として、『ドイツ体操』ではほとんど説明されていなかったその具体的な内容と方法についても扱われている<sup>58)</sup>。なお、『新しい体操 --- メダウの教授法』においてこの領域の部分を執筆したのは、J. ホラーである。

- ・基本運動 (Grundformen der Bewegung)

## 2. 研究領域「動きのゲシュタルトウングとダンス」の内容について

体操の研究領域としての動きのゲシュタルトウングについて、J. ホラーはダンスとともに一括りのものとして、次のように説明している。「動きのゲシュタルトウングのなかでは、とりわけ、動きの流れ、生き生きとした動き、そして洗練された動きの形成がなされ、さらに、パートナーとの動きやグループでの動き、空間構成や音楽体験がなされるのであるが、踊ることは、動きのゲシュタルトウングを敏感に知覚することができる特別な方法のひとつである。」<sup>59)</sup> 従って踊ることもまたメダウの体操の教材に属しており、その際に社交ダンスや芸術ダンスとの境界線ははっきりと引かれるという<sup>60)</sup>。

次に、J. ホラーが体操における動きのゲシュタルトウングの目標として挙げているのは、動きをゲシュタルトすることによって「動きの本質をよく知り、それを深めること」、そして自身の「運動感覚や運動能力を十分に発揮すること」の2つである<sup>61)</sup>。このことは、「ゲシュタルトすることによって、ゲシュタルトウングの法則を解明すること」、つまり、「リズム、強弱法、緩急法の作用、あるいは、空間、時間、力の作用、音と色の作用、光と陰の作用、緊張と弛緩の作用等々、それらを明らかにすること」につながるという<sup>62)</sup>。このことを前提に、彼女が授業の目標として挙げているのは、「生徒たちがひとつの動きのゲシュタルトの特徴を直観的に捉え」、そして、「アウフタクト、アクツェント、アウスクラングから成るリズムカルな動きの形成において、その特徴を目に見えるようにすること」であるという<sup>63)</sup>。その場合に、「個々の動きは、一連の動きのなかに溶け込むが、その特徴は、その動きに即した強弱法と緩急法によって、はっきりと保持される」<sup>64)</sup> ことが重要になるという。このことによって、「動きのゲシュタルトウングは、生き生きとした、全体としてまとまった、そして表出豊かな運動現象の流れとして展開される」<sup>65)</sup> ことになる。さらに彼女は、体操の教育的な課題という観点からみて、ゲシュタ

ルトウングは「生の衝動や躍動に重きをおいた活動」であること、また「自己を表現するような活動、心の豊かさを育むような活動」であることが重要であると述べている<sup>66)</sup>。

こうした目標は、O.F. ボルノーが動きのゲシュタルトウングを、生の充実へと導くような、全体としてまとまった有機的な動きの流れが豊かな形態をもつ、というように理解したのと共通するものといえよう。

## 3. 動きのゲシュタルトウングの授業例

J. ホラーは、『新しい体操 -- メダウの教授法』において、授業例の章も執筆を担当しており、そこで「動きのゲシュタルトウングとダンス」の授業例（対象：16歳から18歳の少女）を提示している<sup>67)</sup>。

ここでは、メインテーマとしてボールの体操が扱われている。その展開を大雑把に簡略化して示してみることにする。最初に、彼女は、「ボールを投げて、弾ませて、走って、受け取る」という簡単な動きのモチーフを課題とし、生徒たちが各自ボールをひとつもって練習し、ピアノの伴奏がそれを補助し、空間、時間、力動性に関して変化・発展させる。次に、体育館の端に列をつくって並んだところから始める。ボールは各列にひとつで、先頭の生徒の横に置いておく。そして、先頭の生徒が、一連の動き「ボールを投げて、弾ませて、走って、受け取る」を練習し、最後にその受け取ったボールを次の生徒に転がして渡す。次の生徒がそれを受け取り、一連の動きを練習する。このように、パートナーとの動き、あるいはグループでの動き<sup>68)</sup>として展開し、練習する。それらをA部分として組み立てていく。次に、Aとは対照的に切れのよい動きで、ボールを突く課題をギャロップ等の移動を加えて練習し、Aのとときと同様に、リズム的・力動的に、そして空間的に変化・発展させ、B部分を組み立てる。最後に、ABAとつないで、ひとつの小さなゲシュタルト（4/4拍子48小節）を仕上げる。それは、おおよそ次のようになる。

**A ;**

- 1 小節目：投げて、弾ませて、走っ、て<sup>69)</sup>
- 2 小節目：向きを、変えて、受け取って、用意
- 3 小節目：頭越しに投げて、弾ませて、向き直って走る
- 4 小節目：向きを、変えて、受け取って、用意
- 5 小節目：前へ、転がし、後ろへ、転がし
- 6 小節目：繰り返し
- 7 小節目：前に、走って、後ろに、走って
- 8 小節目：投げ、て、受け、取る
- 9-16 小節：反対方向へ繰り返し

**B ;**

- 1 小節目：突いて、突いて、突う、く
- 2 小節目：繰り返し
- 3 小節目：右へ、ギャロップ、突いて、突いて
- 4 小節目：左へ、ギャロップ、突いて、突く
- 5 小節目：右手で、左手で、右手で (突く)
- 6 小節目：左手で、右手で、左手で (突く)
- 7 小節目：右、へ、ギャ、ロップ (右手で突きながら)
- 8 小節目：左、へ、ギャ、ロップ (左手で突きながら) 最後に受け止める
- 9-16 小節：繰り返す (姿勢を変えて、例えば膝立ちで、ギャロップなしで、体の周りをぐるっとボールを突く等)

A : A を繰り返す (A の確認あるいは強化)

ゲシュタルトウングは、体操の練習の際に共同作業として行われる<sup>70)</sup> と、J. ホラーは主張するのであるが、この授業例のなかにも、それを示す記述が見られる。そこでは、ほとんどの場合、「私たちが・・・する」と一人称複数の主語が使われ、指導者 J. ホラーがゲシュタルトするのではなく、生徒たちとともに私たちがゲシュタルトすると理解することができる。また、彼女が簡単な動きのモチーフを課題として生徒たちに提示した後のことで、次のような記述もみられる。「私は練習者たちが徐々に見つけ出し、生まれてくる一連の動きをよく観察し、ピアノでそれを後押しする。それによって、動きはより強くアクセントづけら

れ、より流れるようになる。そして、そこで、ひとつの共通するリズムへの同調が起こる。』<sup>71)</sup> こうした授業例のなかでの、共通するリズムへの同調を生じさせるような共同作業のもつ重要性については、前章 3. で示した通り J. ホラーが詳しく説明している。この「共通リズムへの同調」については、R. ボーテ<sup>72)</sup> や K. マイネル<sup>73)</sup> も言及している。

ともあれ、このように共同で行われる体操における動きのゲシュタルトウングではあるが、その個人を評価する際の観点について、J. ホラーは、大学入学資格試験の際のものを例に次の 5 つを挙げている。動きの流れ、リズム、力動性、空間構成、そして、グループ内での貢献等である<sup>74)</sup>。

**おわりに**

1960年代の体操における動きのゲシュタルトウングは、生き生きとしたリズムカルな動き (アフタクト、アクツェント、アウス克蘭グ) をつくり出すこと、すなわち形成すると同時に創出することを意味し、体操改革運動以来の「リズムカルな動きの修練」や「動きづくり」を引き継いだ豊かな「動きの教育」に資するものである。このことが、体操改革運動に関わって 1922 年の会議当時から 1960 年代までずっと活動してきた H. メダウの創立した学校において形づくられている。そこで教師として関わった J. ホラー = フォン・デア・トレンクが長年のメダウの活動の成果を取りまとめたのが、本研究で取り扱った内容になる。

また、J. ホラーは、動きのゲシュタルトウングの方法を具体的に提示した。それは、基本運動、あるいはその組み合わせとしての動きのモチーフを用いて、彼女がリズムの要素として最も重要視する強弱、緩急の観点で、その動きのリズミカルな分節を特徴づけるという方法であり、さらに、空間、手具、パートナー、グループ等々との関係で展開していくというものである。このことに合わせて、彼女は、体操においてはリズムカルな動きの形成とゲシュタルトウングは常に同時進行するということも主張している。

以上のように、J. ホラー = フォン・デア・トレ  
 ンクの主張から、1960年代における「動きのゲシュ  
 タルトウング」の理解はかなり明確になり、意味  
 内容と方法が形づくられるに至っていると結論づ  
 けられる。

## 引用・参考文献

- 1) 拙稿、『ドイツ体操 (Deutsche Gymnastik)』  
 における「動きのゲシュタルトウング」につ  
 いて -- O.F. ボルノーの「課題としてのゲシュ  
 タルトウング」を手掛かりにして、スポーツ  
 史研究 第29号、29-30頁、2016年。
- 2) 拙稿、『ドイツ体操』における動きのゲシュ  
 タルトウングについて -- O.F. ボルノーの「課  
 題としてのゲシュタルトウング」を手掛かり  
 にして、スポーツ史学会第28回大会発表抄  
 録集、10-11頁、2014年。
- 3) 拙稿、『ドイツ体操』における動きのゲシュ  
 タルトウングについて -- O. グルーベの「教育  
 的視点における動きと動きのゲシュタルトウ  
 ング」を手掛かりにして、スポーツ史学会第  
 29回大会発表抄録集、30-31頁、2015年。
- 4) 拙稿、『ドイツ体操』における動きのゲシュ  
 タルトウングについて -- A. ゼイボルトの「体  
 育におけるゲシュタルトウング (Gestalten)  
 の方法学について」を手掛かりにして、ス  
 ポーツ史学会第30周年記念大会発表抄録集、  
 40-41頁、2016年。
- 5) Bollnow, O.F., Gestaltung als Aufgabe,  
 In: "Die Gestaltung" IV. Kongress für  
 Leibeseziehung 4.-7. Oktober 1967 in  
 Stuttgart, Verlag Karl Hofmann, 1967., S.17-  
 38.
- 6) Grupe, O., Bewegung und Bewegungsgestaltung  
 in pädagogischer Sicht, In: "Die Gestaltung"  
 IV. Kongress für Leibeseziehung 4.-7. Oktober  
 1967 in Stuttgart, Verlag Karl Hofmann, 1967.,  
 S.39-56.
- 7) Seybold, A., Zur Didaktik und Methodik  
 des Gestaltens in der Leibeseziehung,  
 In: "Die Gestaltung" IV. Kongress für  
 Leibeseziehung 4.-7. Oktober 1967 in  
 Stuttgart, Verlag Karl Hofmann, 1967., S.57-  
 76.
- 8) 岩田晏実他、実用クラシック音楽用語事典、  
 ドレミ楽譜出版社、2014年、5頁には、アウ  
 フタクトは、「弱起のこと」とあり、また、  
 91頁には、上拍はアウフタクトとある。また、  
 Bode, R., Rhythmische Gymnastik zweite,  
 erweiterte Aufl., Wilhelm Limpert-Verlag,  
 1957., S.31. には、運動の観点から次のような  
 記述がある。「音楽におけるアウフタクトは、  
 本来、音を出すために必要な用意の動き以外  
 の何ものでもない。例えば、太鼓を打つ前に  
 腕を振り上げる、あるいは行進曲の演奏の際  
 に行進運動の分節をうまく表現しようと足踏  
 みをするために足をもち上げるようなもので  
 ある。」
- 9) 岩田晏実他、前掲書、5頁に、(独) アクツェ  
 ントは、(英) アクセントのこととあり、アク  
 セントは「曲中における強拍部分、また、前  
 後の音に比べて強く奏するという相対的な意  
 味をもつ強弱記号」とある。
- 10) Auftakt, Akzent und Ausklang については、  
 以降カタカナ表記で用いる。
- 11) Seybold, A., a.a.O., S.73.
- 12) Erbguth, H., Medau, H.J., Porträt einer  
 Gymnastikschule --- Entstehung und  
 Entwicklung rhythmischer Gymnastik am  
 Beispiel der Medau-Schule, Verlag Karl  
 Hofmann, 1991., S.187. によると、J. ホラー =  
 フォン・デア・トレンクが、1962年にメダウ  
 体操学校に赴任したとき、H. メダウは72歳で、  
 定期的な授業や発表会から引退するという希  
 望を表明した。彼女はメダウの理論を引き継  
 ぐのに適任と目された。彼女は専門教育をベ  
 ルリンで受け、その傍ら演劇の勉強もし、現  
 代音楽にも取り組んだ。卒業後、就職。その後、  
 メダウ体操学校で協力するように要請を受け  
 た。そのときには、すでに40歳にならんと

していた。

- 13) 拙稿、メダウとその体操教授法について --「ヒンリヒ・メダウ、75歳の誕生日を祝して」より、びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要 第5号、123-132頁、2007年、他によると、H.メダウは、ボーデの体操学校を卒業した後、ミュンヘン大学やベルリン大学でも学んだ。1925年のドイツ体操同盟の結成後、当初はボーデ体操学校の代表を、またその同盟の副議長を務めた。ボーデのもとで、彼は、7年間、講習や講演そして実演会を通して、リズムカルな動きの修練の普及に努めた。国内だけでなく、海外にも招聘され、1928年にはニューヨークのコロンビア大学で夏期講習を行った。その折にニューヨークでバスケット・ボールのゲームを目にし、後にボール体操を考案することになる。ドイツに帰国後、1929年に、彼はボーデの学校から独立し、体操女教師養成所、メダウ学校をベルリンに設立した。その後、メダウによって指導される学校は、1943年にはブレスラウに、1948年にはフレンスブルクに、1954年にはコーブルクのホーエンフェルス城に建てられた。
- 14) Holler-von der Trenck,J., Sinn, Bedeutung und Entwicklung des Gestaltens in der Modernen Gymnastik, Leibesübungen, S.3-6., 1967.
- 15) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., Moderne Gymnastik--Lehrweise Medau, Pohl-Druckerei und Verlagsanstalt, 1967.
- 16) Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.5.
- 17) ebd., S.3.
- 18) Bode,R., a.a.O., S.23.には次のような記述がみられる。「あらゆる動きは、3分節された経過をとる。すなわち、用意の動き (Ausholbewegung) = 上拍 (Auftakt)、主の動き (Entladung) = 強調 (Betonung)、納めの動き (Auslaufbewegung) = 下拍 (Abtakt) である。」そこで挙げられている下拍 (Abtakt) は、ebd., S.32.で、「例えば動きが終わること (Ausklingen)」と補足説明がされている。また、Bode, W., Rudolf Bode--Leben und Werk, Festschrift des Bode-Bundes e.V., 1972., S.17.では、「その (3分節) 際、ひとつの動きが複数の上拍をもつこともありうる … (中略) … 周期的な動きの際には、3分節が2分節になることもある。これは矛盾ではない。動きの最終局面が、同時に新しい上拍局面になる。局面融合が起こるのである」という記述もみられる。
- 19) Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.3.
- 20) ebd.
- 21) ebd.
- 22) ebd., S.5.
- 23) ebd., S.4.
- 24) ebd., S.5.
- 25) ebd.
- 26) ebd., S.3.
- 27) ebd., S.5.
- 28) ebd., S.6.
- 29) ebd.
- 30) ebd., S.3.
- 31) ebd., S.5.
- 32) ebd., S.6.
- 33) 岩田晏実他、前掲書、129頁によると、デュナーミク (独) Dynamik は、「ダイナミックスのこと」とあり、110頁に、ダイナミックスは、次のように記載されている。「音楽上の強弱の表現方法を意味する言葉。強弱記号は具体的な標示であるかのように思われがちであるが、楽曲の性格によって表現方法が異なりその表現方法は演奏者にゆだねられることがほとんどである。その表現方法の総称として用いられる言葉で、いわゆる、強弱表現の解釈とその演奏方法のことである。」
- 34) 同書、6頁に、次のように記載されている。アゴーギク (独) Agogik は、「楽曲演奏の際、テンポの厳格さととらわれずに微妙な速度変化をつけ、音楽表現にメリハリをつける方法。

- 緩急法とも呼ばれ、テンポ・ルバートやラレントアンド等の速度標示もその一種といえる。」また、195頁には、ルバートは、「自由な速度(テンポ)でという意味の速度記号。速度(テンポ)にとらわれず、自由に感情表現をすることを指示する」とある。190頁には、ラレントアンドは、「だんだん遅くの意味」とある。
- 35) 同書、146頁に、拍について、「音楽に秩序をもたせるために一定の時間ごとに刻む単位」という記述があり、この拍の間隔(長さ)によってテンポが決まるとされている。111頁に、(独) Takt は、「拍を意味するラテン語からきたもの」とある。また、拍節については、146頁で、(独) Metrum、「ある一定時間に構成されるアクセントの周期的反復」とされている。
- 36) Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.4.  
 37) ebd., S.6.  
 38) J. ホラーは、音楽の形式に倣って、一連の動きの展開 A とそれとは違った一連の動きの展開 B をつなぎ合わせ、さらにまた A に戻ることを ABA 形式といている。因みに、門馬直衛、音楽形式<<新版>>、音楽之友社、1998年の41頁には、歌曲形式の三部形式は、3つの大楽節(おおむね8小節)でできているものであり、その公式は ABC であるが、それではまとまったものになりづらく、第三の大楽節を第一のものと同じくし、ABA とすることが多いという説明がある。
- 39) Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.6.  
 40) ebd., S.4.  
 41) ebd.  
 42) ebd.  
 43) ebd.  
 44) ebd., S.5.  
 45) ebd., S.6.  
 46) ebd.  
 47) ebd.  
 48) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.112.  
 49) ebd., S.120-144.  
 50) Grundformen der Bewegungsentwicklung については、直訳すると、動きの発展の基本形態となる。しかし、そうであると前掲の動きの発展(Bewegungsentwicklung)との差がほとんどなくなる。そこで、説明されている内容を確認し、その内容に合わせて動きの発展の学際的研究とした。
- 51) 拙稿、ドイツ体操同盟の成立に果たした F. ヒルカーの役割について、スポーツ史研究 第24号、3頁、2011年。  
 52) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.48 und 57.  
 53) ebd., S.33.  
 54) Hilker,F., Deutsche Gymnastik, Bibliographisches Institut, 1935.  
 55) Bernett,H. (Hrsg.), Terminologie der Leibeserziehung 4. neu bearbeitete Aufl., Verlag Karl Hofmann, 1968., S.23.  
 Röthig,P. (Hrsg.), Sportwissenschaftliches Lexikon 4. unveränderte Aufl., Verlag Karl Hofmann, 1977., S.56.  
 56) Medau,H., Medau,S. und Holler-von der Trenck,J., a.a.O., S.98-215.  
 57) ebd., S.137-138.  
 58) ebd., S.137-138 und 187-202.  
 59) ebd., S.137.  
 60) ebd., S.138.  
 61) ebd., S.137.  
 62) ebd.  
 63) ebd.  
 64) ebd.  
 65) ebd.  
 66) ebd.  
 67) ebd., S.187-202.  
 68) ebd., S.196.  
 69) 「投げて、弾ませて、走つ、て」の原文は、We-er-fen- und prellen und laufen であるが、ドイツ語と日本語の音節の違いもあり、苦心したところである。実際に動く場合には、実

施者や指導者の裁量に任せられるところであるとも思われる。以降の表記も同様である。

- 70) Holler-von der Trenck, J., a.a.O., S.5.
- 71) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., a.a.O., S.197.
- 72) Bode, R., *Ausdrucksgymnastik mit dreihundertsechzig Übungen und zwanzig Bildtafeln* 5.Aufl., C.H.Beck'sche Verlagsbuchhandlung, 1933., S.23. に、体操の授業中の描写で生徒たちが「有機的統一体に合一されていく」というような状況の記述がある。
- 73) Meinel, K. und Schnabel, G., *Bewegungslehre* 2.Aufl., Volk und Wissen Volkseigener Verlag, 1977., S.135. に、Zur kommunikativen Funktion des Bewegungsrhythmus の記述があり、K. マイネル著、金子明友訳、マイネル・スポーツ運動学、大修館書店、1981年、175頁に、運動リズムの伝染性の作用についての記述がある。
- 74) Medau, H., Medau, S. und Holler-von der Trenck, J., a.a.O., S.202.

(2018年 4月19日受付)  
(2018年 11月22日受理)